

「現地を訪問して思うこと」

1976年度 経済学部卒業 湯浅清和

平成28年11月5、6日の校友会主催の東北応援ツアー岩手県コースに始めて参加させていただきました。それまでは、マスコミの報道(主にテレビ、新聞等)でしか見たことがない被災地の現状を目の当たりにして驚愕の連続でした。

1日目、遠野伝承園を見学した後、三陸鉄道南リアス線の釜石-盛駅間の震災学習列車に乗車し三陸鉄道の職員の方が当時の被害状況、及び現在の復興状況を詳しく説明してくださいました。

復興活動が遅々として進んでなく、まだまだ仮設住宅に住まわれている方が大勢おられるということでした。特に印象に残ったのは、その職員の方の説明で、被災当時の避難状況で当時、トンネルの中で電車が停止して乗客の方を近くの安全な駅まで誘導し全員無事であったことを説明していただきました。又、当時のことを思い出されたのか、目に涙を浮かべながら(私には、そのように見えました)真に迫る語りをしていただき、胸にじんときるものがありました。又、この沿線の地域は、1896年(明治29年)6月15日の明治三陸津波の経験をもとに被災後当時の村長さんが高台に家を移転させて今回の被害はほとんど免れたという話をされて、地震、津波の対策は、万全に望むことに越したことがないことを改めて痛感しました。この乗車途中、列車は、一時停止し全員で黙とうを捧げ哀悼の意を表しました。そのあと大船渡をバスの車窓から眺めましたが、被災前の写真と現在の風景を比べる市街は、ほとんど消滅していることに愕然としました。またバスガイドさんの説明の中に本来なら10年は、かかるといわれていました、山の土を持って来て盛り土にする工事(約3mほどかさ上げ)は、ベルトコンベヤーで運んで、一年半程で工事は、終わったそうです。でも元の住民の方が住めるようになるのは、まだまだ先のようです。

その日の夕刻、宿舎に着き、まもなく勉強会が開かれ、現地校友会4名の方の体験談を聞かせていただきました。その中で被災地(地名は失念しました)の教育委員会に勤めておられた方の体験談が特に印象的でした。被災当時役所に泊まり込みで復旧、救援活動に尽力された様子を聞かせていただき、私たちが思っている以上のご苦勞、困難さがあつたことを改めて思い知らされました。翌日、陸前高田の奇跡の1本松、道の駅高田松原、復興まちづくり情報館など見学させてもらいましたが、道の駅高田松原の建物に記してあつた、津波の到達高度14.5mと表示してあつてこの津波大きさをまざまざと実感いたしました。

最後に亡くなられた多数の方々に改めて心よりお悔やみ申し上げますとともに、被災された方々に心よりお見舞い申し上げます。一刻も早い復興を心よりお祈り申し上げます。

今回、この企画を運営された現地校友会の皆様には、心より御礼、感謝申し上げます。

ありがとうございました。

